Ⅳ 「九州の円筒土器」とその編年の問題

賀　川　光　夫

九州各地域に広範囲にわたって「円筒土器」が分布し、その出土状況や、関係遺物、住居跡を含む集落の特異性などから、円筒土器の編年をにはかに考えることはむずかしい問題といえる。しかし、共伴土器がおよそ固定してきたことや、石器の組成が大要明かにされつゝあることなどから編年の大綱ができつゝある。加えて、竪穴住居に付随して集石炉と判断されるものが発見されるなど考古学的分野においてはあと一歩のところまできた。更に九州の南部一帯に分布する阿蘇、霧島系火山の噴出物による〈アカホヤ〉の堆積はしすでにC^{14}による年代の判定がおこなわれている。理化学や地質学的研究による地層の代年設定は遺物や地層の序列による相対年代とともに、絶対年代をも明確にすることができた。幸い円筒土器の出土は、この〈アカホヤ〉の下層に分布するとみられそれによっておおかたの時代を設定できる。こうした円筒土器の問題についての編年について以下小稿を設けてみた。

（Ⅰ）

円筒土器の編年について、考古学的観察にもとずく所見は、相対的なものであることは言うまでもない。高木、弥栄、野間の3氏は、それぞれ、出土遺物、層位などの総合的な判断にもとずいて土器の出土状態を的確に指示している。特に南九州の場合は貝殻文様に終始して、土器表面には条痕文と押引文を顕著にあらわして文様を構成している。その性格はきわめて特徴的である。これをかりに縄文早期、押捺文と対比するとすればその層位的確認によって時期の決定がおこなわれることになる。南九州では押捺文土器の発見が熊本県境の出水貝塚や牟田尻など稀薄でこの対比は困難である。しかし、円筒土器の一部は東九州の南部一帯にも普遍し、宮崎市跡江遺跡において数多くの出土をみた。この遺跡においての報告がないので押捺文と円筒土器の関係を細述することはできぬが東九州の「ヤトコロ式」南九州での「出水式」に比定されるものと推定される押捺文土器が貝塚の中から相当数出土されているので、早期土器と円筒土器との対比が目下のところ重要であると思われる。。この跡江貝塚は、その他に手向山式土器、塞ノ神式などが複雑に堆積していて、それぞれの層位的観察はきわめて困難であるが、その精察は、南九州での早期末から前期初頭にかけての重要な意義をもつ。

さて跡江貝塚における押捺文と円筒土器が直接、間接に関係するかどうか層位的な問題を検討するにあたって、ヤトコロ、出水式土器の再検討が必要となる。石清水、出水、跡江など南九州の押捺文土器の終末は、底部が小さいながら平底で輪積み技法で整形された土器と考えられる。この土器の南限は、出水、石清水、跡江など、南九州の北部にとどまるようである。一方貝殻文を施文する円筒土器群は、押捺文の南限をもって北限として〈両者は若干の出入りがある〉九州南部に集中して分布する。この相互関係は、押捺文、円筒土器の層位関係としてではなく、分布を意味するが

両者共伴の遺跡として、跡江貝塚の包合状態は注目されるものである。

押捺文土器は、回転押捺技法として所謂手向山式土器の中でもみられるが、系統的には「ヤトコロ」式土器が最後の形式とみてよい。このヤトコロ式は、出水、石清水、跡江になどの遺跡にみられる如く、口縁部やゝ外反し、胴部に起伏をみながら小さい平底部に終わる形式である。器壁もやゝ厚味を増し、文様も粗大化の傾向をたどるが、無文土器や、貝殻条痕土器を若干含むほか他類土器を混入しない押捺文土器の単純形式である。押捺文土器が単純でたどれるのは、この平底押捺文土器の「ヤトコロ」式までである。

さてヤトコロ式の形態は、技術的に輪積技法の所産であると考える。胴部の起伏は、その技法のもつとも初期的なものであって、形態的には輪積技法の汎縄文土器的表現といえる。南九州の円筒土器とヤトコロ式との形態的相似はこの初源的輪積技法によってであるといえる。かりに両者が土器形成技術の上で類似しているとすると、土器形成技術の新たに克復し得た共通の方法である。しかし、押捺文自体は消滅に向い、円筒土器自身は新らしい時代に向うものとなる。そこで円筒土器を早期か、前期のどちらに位置するかということで絶対年代C^{14}その他理化学の応用に求めることも可能であるが、考古学においては〈歴史の志向〉生活の根源としての生産技術や、それにともなう生活手段によって認識するものであると考えるので、押捺文土器の消滅えの方向として「ヤトコロ」式を早期末として、円筒土器の出現は、前期の曙とすることが妥当であると考える。

さて、高木正文氏は、西九州での押捺文土器と円筒土器にふれ、両者の関係は系列、系統的にとらえられる、としている。この問題は、まさに早期・前期えの移項として注目すべきものであるが、これを具体的に証明するためにはなお多くの研究日時を要することになろう。しかし、前述の如く輪積技法における縄文土器の汎日本的傾向の所産として、円筒土器をとらえるならば、それは正しい推理である。

西九州での円筒土器は、多くの場合塞ノ神式土器と共伴関係にあるという。そして、南九州の円筒土器の貝殻文様に加えて、撚糸文、縄文、沈線文など複雑な施文技術をあらわす。撚糸文と縄文が早期の押捺文土器と共伴することは、すでに押捺文土器の最盛期である川原田洞穴や、早水台期においてみられている。しかし、それが顕著に出現するのはヤトコロ式の終末であり、その状況は政所遺跡で証明された。そして、縄文技法が明かに広く普遍し、その特徴があらわれるのは、円筒土器のうち西九州である。しかし円筒土器の発展と、その推移については何の手掛かりもなく、撚糸文、縄文技法が他の前期土器と、その後の土器にどのように影響していくか暗中模索の状態である。しかし、五十市遺跡の如く斜縄文を全器面に施す傾向は、顕著な縄文技法の導入でなければ漂移的なものとなろう。東九州全域には、瀬戸内一帯の縄文の影響をうけた土器が中期に顕著であるが五十市のそれは前期の円筒土器で、それに対比すべき資料といえば源流として帝釈峡寄倉岩陰遺跡12層や、菱根遺跡の早期土器があげられよう。この全面縄文の土器に対する今後の注意は欠かせぬ問題である。五十市のそれは器壁全面に斜行する縄文施文であるから、縄文技法の本格的なものであり、西日本の縄文技法の確立は、やはり、瀬戸内と一帯として考えなければならぬ。

塞ノ神式土器と共伴することが多い西九州の円筒土器は、目下のところ層位的に両者を区別する

ことは困難である。一方五十市の斜縄文土器は、所謂「アカホヤ」層の下部より出土している点で、精査の結果塞ノ神式土器の下層に位置して層位をなすことが確認された。

塞ノ神式土器をめぐって早期、前期の議論がある。しかし前述の如く、考古学の志向する技術や形態の問題から円筒土器を C^{14} 測定にかかわらず前期としたい筆者の考えからすると塞ノ神式も当然前期になる。そして前期の位置については層位的観察にもとずかなければなるまい。

（Ⅱ）

早期末、前期初頭の層位観察は、鹿児島県加栗山と加治屋園の2遺跡、大分県政所遺跡で精察された。この近年の調査での層位的研究は、早期・前期の関係を充分に理解することができる充分な資料といえる。加栗山加治屋園の両遺跡は、今後の報告書でその成果を精細に述べるであろうからそれに期待するとして、大分県荻町馬渡政所〈政所遺跡〉についての層位的観察をもとにして、早・前期の問題を考察してみよう。この場合は、円筒土器の層位を政所遺跡の出土状況から塞ノ神式をもってあてなければならず、所謂円筒土器と、塞ノ神式の層位は両者出土の加栗山、加治屋園などの遺跡を参考として判断せざるを得ない。

馬渡政所〈政所遺跡〉での層位的調査は、1976年4月末から5月初めにわたっておこなわれた。遺跡は大野川の上流・滝水川の支流馬渡川とその支谷の合流点に突出した舌状台先端標高530 *m*にある。遺物を包含する一帯は、舌状台地の先端で、荻町と竹田市管生を結ぶ広域農道が西側を南北に貫き、その東側にあたる三角形の台地末端部である。台地の先端は、馬渡川と支谷が合流して、深い渓谷が東に向う。

遺跡は、畑地の水田化による造成地として、表面が削平されて遺物が発見された。したがって、学術調査の対象として発掘がおこなわれたのは、こうした地さげの最中であって、わずかにパミスを含む赤土層〈アカホヤ〉上部に褐色土層の堆積がみられた。実際の調査は、場所によっては赤色土層下において観察されなければならない状態であった。層位的観察は、数ケ所で実施したがG－6区における遺物の層位的検討が層の秩序と遺物の堆積が良好であったために、その地点での調査結果を参考にすることがよい。

すでに上層は削平にあっているが、一部に褐色土層が残存しており、その部位に焼石類が残こされているところからこれをⅠ層と名付けた。このⅠ層は、Ⅱ層とした赤土層の上面とも理解されるが、赤土層には遺構は勿論遺物の堆積がなく、明確に分離できる。このⅠ層の遺物は、焼石類の堆積によってある時期の生活面を想定できるはずであったが、層の攪乱によって数次の遺物の混在とみることができる。

赤土層は南九州における〈アカホヤ〉と呼ばれるパミス混入の火山灰土層で、この堆積層は、全般に遺構、遺物の存在をみることはできない。したがって、この無遺物の〈アカホヤ〉層は、それを挾んで上、下の堆積を明確に分離することができるところから、これを重要な鍵層とすることができる。すなわち、比較的荒粒子で一部に黄色のパミスを含み、明かるいオレンヂ色をしているところから、一見してこの層を認識することができる。しかも、この層は、地質学的にも注目される

沖積世の火山灰堆積層で、Tephrochronological Key bed（オレンヂ色浮石質火山灰層）として重要であるとされている。そしてこの分布は南九州から中九州、一部は四国地方徳島平野にまで呼んでいるとされる。〈アカホヤ〉の堆積年代のC^{14}の検査では、南九州で、その最上部腐植部で4,640±80^{y} B・P（Gak－584）である（松井1960）。また〈アカホヤ〉の主部は6,000～6400^{y} B.P.（幸屋火砕流）とされるからこの火山終末期の塞ノ神B式が6,300^{y} B.P. と計算されている。また幸屋火砕流のC^{14}測定は宇井忠英氏他の研究があり、6,400±110、6050±110、6290±120^{y}B.P.（宇井、福山、1973）ここでも計算上大差ないことがわかる。〈アカホヤ〉の堆積は、この砌先から縄文前期初頭に位置づけできる。

馬渡政所の赤土層〈アカホヤ〉層をⅡ層として、ここには遺物の堆積をみない。Ⅲ層は〈アカホヤ〉につづいて赤褐色土層の水平堆積で、早期遺物に混在して塞ノ神式土器が6.6％認められた。更にⅣ層はやゝ明かるい黒土層で、ここから15％の塞ノ神式土器が発見されており、塞ノ神式土器の混在は、Ⅳ層が最も多く、ここを境に押捺文土器が多量を占める。土器包含層のうち最下層のⅧ層は撚糸文土器が最多を占め58.3％で、無文土器25％、楕円押捺文8.3％、塞ノ神式の存在はない。これを〈アカホヤ〉をKey bedとしてみると、塞ノ神式は〈アカホヤ〉に接した下層に位置して包含されることが理解されC^{14}測定による〈アカホヤ〉6.000－6,400^{y} B. P. 塞ノ神式の6,300^{y} B. P. に合致する。熊本県下における各種円筒土器が、この地質学的考察と、C^{14}による化学的検討にもとずき塞ノ神式に共伴するとなれば、おのずから年代的把握を可能にする。

さて鹿児島県における円筒土器の編年は〈アカホヤ〉下部に褐色腐蝕火山灰層があり、その上位に塞ノ神式、下位に石坂式が認められ明らかに層位をなしているといわれる。また、円筒土器の顕著な出土は、その下部に堆積の黒褐色腐蝕火山灰層の上位にあるといわれるので、塞ノ神式との層位関係は明らかである。ここで注目すべきことは熊本県各地の円筒土器の層位と鹿児島県各地の層位とに秩序がみられないことである。前者では塞ノ神式と共伴・後者は層位的に古い位置を占めることである。この両者の関係は、前者は押捺文土器との層位で検討されている点で注目され、後者は、押捺文土器と無関係（押捺文土器稀薄で層位的に検討できない）に層位的研究が進められている。この両者の層位については今後の検討を要すべき点である。

九州地方では〈アカホヤ〉層の堆積を境に、Fauna、Floraに顕著に変化がみられ、海進現象があらわれる。塞ノ神式土器の出現期にあたる黒褐色腐蝕火山灰層はC^{14}で6360±90^{y} B・P（Gak－583）（1967、地学団体研究会）にあたる。このように〈アカホヤ〉層をKeybedとすると、この気候、植生の変化をここにみることができるし、C^{14}測定で、この層序が6,000－6,400^{y} BP、と算定されるので、この赤土堆積を早期・前期の境界とみればきわめて合理的である。しかし、土器の形式に編年の基礎をおく考古学においては、尖底・平底の規準〈それを作る技術〉を考慮しないわけにはいかず、年代的考察において科学的検討を加えながら編年においては円筒土器を前期初頭に位置ずけておきたい。

最近の層位的研究から大分県荻町馬渡政所遺跡の層位的観察にもとずき円筒土器の層位に関する所見を述べてみた。この層位については更に加栗山遺跡や加治屋園遺跡の層位が明確になればより精察可能になろう。

円筒土器文化の層位的問題を検討するために地質学で言う＜アカホヤ＞層、Tephrochronolgical Key beyと、C^{14}検査は注目してよい。すなわちこのKey bedは6,400ᵞ～6,050ᵞ B.P.と計算されているので、ここでは、他のC^{14}の数値と対比して6,050ᵞを取ることにした。その結果＜アカホヤ＞を挟んで縄文前期の編年がおおかた確立したと考えてよい。

高木正文氏の「円筒土器の前後に関する考察」の問題をC^{14}によつて裏付けてみると以下の数値（絶対年代）をあてることができる。この数値は一部を除いて坂田邦洋氏の厚意によつて使用した。後尾の遺跡名は標式遺跡を意味する。

（4類押捺文）7320±130ᵞ B.P.（Gak4808）＜ヤトコロ—大分＞

（6類円筒土器）6360±90ᵞ B.P.（Gak583）＜塞ノ神—鹿児島＞

（7類細隆起文）5950±210ᵞ B.P.（Gak5941）、5680±60ᵞ B.P.（Gak4734）＜轟—熊本＞

（8類細線刻文）5190±130ᵞ B.P.（N—268）＜曽畑—熊本＞

C^{41}による絶対年代は、高木氏の分類をほぼ裏付ける結果となった、これを次表でみると、＜アカホヤ＞の6050ᵞ B.P.の下層に塞ノ神の6360ᵞ B.P.そして押捺文終末のヤトコロの7320ᵞ B.P.の間、6,400～7,000ᵞ B.P.に円筒土器の絶対年代を挿入することが可能となる。そしてこれを縄文前期前半とし、前期の上限を7,000ᵞ B.P.を越えるこがないものと考える。ここにTephrochronolgical Key bedの層位的評価が生まれるものと考える。

	時代	試料	C^{14}＜B.P.＞	標式遺跡
前期	後半	曽畑	5190±130（N268）	＜曽畑＞
	中葉	荘	5680±60（Gak4734）	＜轟＞
		上畑田	5950±210（Gak5941）	
	＜アカホヤ＞ Tephrochronological Key bed＜6050ᵞ＞			
	前半	塞神	6360±90（Gak583）	＜塞ノ神＞
		跡江	6360±120（Gak5534）	＜吉田＞
早期	後半	跡江（下）	7320±130（Gak4808）	＜ヤトコロ＞

参考文献

1957 賀川光夫 押捺文土器共伴資料 九州考古学 2

1921 薩摩国出水貝塚発掘調査報告 京都帝国大学文学部考古学研究報告 第6冊

1958 河口貞徳 出水貝塚 鹿児島県文化財調査報告 5

1954 寺師見国 南九州の縄文土器

1959 酒詰仲男、石部正志「島根県菱根遺跡」同志社大学人文科学紀要 2

1959 常釈峡遺跡群の調査研究 1 帝釈峡調査団

1960 松井 健 大隅半島の埋没性火山灰土壌の類別及び起源について 資源研彙報 №52—53

1961 和島誠一、同上、 追補及び総括、資源研彙報 №54—55

1973 宇井忠英 幸屋火砕流—極めて薄く拡がり堆積した火砕流の発見火山、第2集18—3

1967 日本の第4紀 地学団体研究会 専報15号

おわりに

「九州の円筒土器」特集は、最近の九州各地で調査され、それが話題となりつゝある多くの課題とは違って、各地で一つの問題を地道に研究した成果である。問題の提起は河口真徳氏であって、その問題の集成発展といえる。そしてこの円筒土器論について筆者には一つの感慨があるのである。1960年の盛夏故坂本経堯氏と熊本で会合し、九州における「縄文文化の課題」について議論をした。そのさい、熊本県菊地地方の各地から採集された口縁部直口し、撚糸文を施す土器については東北日本の円筒土器と対比する充分な資料ではないかとの結論に達した。しかし残念ながら資料不足であった。高木正文氏は、その資料とは関係なく、自力で円筒土器の分布とその内容についての研究をおこなったが、まさに坂本氏の後を継いだ研究ということができる。この特集は、われわれの不勉強の由に、坂本経堯氏の生前に刊行することができず、墓前に捧げる結果となったが、多くの研究者が、研鑽を積み、その疑問のなかから生じた「九州の円筒土器」文化は、先輩諸兄の研究の賜物であり、深くその業績を讃え、われわれ浅学に鞭打ち今後に対処したいものであると考える。ともかく、縄文文化に対する研究は、その背景の把握に意外に手間取り、問題の作成とその展望は資料の裏付けの必要によって確実なものとなるため多くの困難を克服しなければならない。そうしたなかで、「円筒土器」は、ようやく九州の南半で確認され、その形式の分類と、分布状態について問題を提起する段階になったといえる。したがってその土器の背景を考察しようとすれば、その目的での発掘が必要となる。更に遺跡における各種分析も必要であるから、それら理化学の応用もなければならぬ。こうした点で、「円筒土器」の研究は今後において期待するところが大きい。

南九州一帯に広く分布する〈アカホヤ〉と呼ぶ赤色のパミスを含んだ土壌は、あまりにも鮮明である。褐色土壌の間に堆積したこの赤土は、縄文早期と前期を分断する地層ともなり得るのである。九州の円筒土器が、押捺文土器と層位で確認された最近の政所遺跡の発掘は、阿蘇周辺でのこの赤土の堆積の重要性を認識することができた。この問題は後の機会にゆずるとして、〈アカホヤ〉と呼ばれた黄色いパミスを含んだ赤色土層の堆積は、今後円筒土器の層位的問題を示唆する重要な地層となろう。